

第 16 章

「僕たち、あのトイレに何度も入ってたんだぜ。その間、マートルはたった小部屋三つしか離れていなかったんだ」

ロンは翌日の朝食の席で悔しそうに言った。

「あのときなら開けたのに、今じゃなあ…」

クモを探すことさえ容易ではなかったのだ。先生の目を盗んで女子トイレに――それも最初の犠牲者が出た場所のすぐ脇のトイレに――に忍び込むなどということはほとんど不可能に近いだろう。

ところが、その日最初の授業、「変身術」で起きた出来事のおかげで、数週間ぶりに「秘密の部屋」など頭から吹っ飛んだ。

授業が始まって十分もたったころ、マクゴナガル先生が、一週間後の六月一日から期末試験が始まると発表したのだ。

「試験？」 シューマス・フィネガンが叫んだ。

「こんなときにまだ試験があるんですか？」 ハリーの後ろでバーンと大きな音がした。

ネビル・ロングボトムが杖を取り落とし、自分の机の脚を一本消してしまった音だった。

マクゴナガル先生は、杖の一振りで脚を元通りにし、シューマスの方に向き直ってしかめっ面をした。

「こんなときでさえ学校を閉鎖しないのは、みなさんが教育を受けるためです」

先生は厳しく言った。

「ですから、試験はいつものように行います。皆さん、しっかり復習なさっていることと思いますが」

しっかり復習！ 城がこんな状態なのに、試験があるとはハリーは考えてもみなかった。

教室中が不満たらたらの声で溢れ、マクゴナガル先生はますます恐いしかめっ面をした。

「ダンプルドア校長のお言い付けです。学校

Chapter 16

The Chamber of Secrets

All those times we were in that bathroom, and she was just three toilets away,” said Ron bitterly at breakfast next day, “and we could’ve asked her, and now …”

It had been hard enough trying to look for spiders. Escaping their teachers long enough to sneak into a girls’ bathroom, the girls’ bathroom, moreover, right next to the scene of the first attack, was going to be almost impossible.

But something happened in their first lesson, Transfiguration, that drove the Chamber of Secrets out of their minds for the first time in weeks. Ten minutes into the class, Professor McGonagall told them that their exams would start on the first of June, one week from today.

“Exams?” howled Seamus Finnigan. “We’re still getting *exams*?”

There was a loud bang behind Harry as Neville Longbottom’s wand slipped, vanishing one of the legs on his desk. Professor McGonagall restored it with a wave of her own wand, and turned, frowning, to Seamus.

“The whole point of keeping the school open at this time is for you to receive your education,” she said sternly. “The exams will therefore take place as usual, and I trust you are all studying hard.”

はできるだけ普通通りにやって行きます。つまり、私が指摘するまでもありませんが、この一年間に、みなさんがどれだけ学んだかを確かめるということです」

ハリーは、これからスリッパに変身させるはずの二羽の自ウサギを見下ろした。

――今年一年何を学んだのだろう？ 試験に役立ちそうなことは、何しつ思い出せないような気がした。

ロンはと見ると、「禁じられた森」に行ってそこに住むようにと、たった今、命令されたような顔をしている。

「こんなもんで試験が受けられると思うか？」ロンは、ちょうどピーピー大きな音をたてはじめた自分の杖を持ち上げて、ハリーに問いかけた。

最初のテストの三日前、朝食の席で、マクゴナガル先生がまた発表があると言った。

「よい知らせです」途端にシーンとなるどころか、大広間は蜂の巣を突ついたようになった。

「ダンブルドアが戻ってくるんだ！」何人かが歓声をあげた。

「スリザリンの継承者を捕まえたんですね！」レイブンクローの女子学生が、黄色い声をあげた。

「クィディッチの試合が再開されるんだ！」ウッドが興奮してウオーッという声を出した。

ガヤガヤが静まったとき、先生が発表した。

「スプラウト先生のお話では、とうとうマンドレイクが収穫できるとのことです。今夜、石にされた人たちを蘇生させることができるでしょう。言うまでもありませんが、私は、そのうちの誰か一人が、誰に、または何に襲われたのか話してくれるかもと考えています。この恐ろしい一年が、犯人逮捕で終わりを迎えることができるのではないかと、期待しています」

歓声が爆発した。ハリーがスリザリンのテーブルの方を見ると、当然のことながらドラ

Studying hard! It had never occurred to Harry that there would be exams with the castle in this state. There was a great deal of mutinous muttering around the room, which made Professor McGonagall scowl even more darkly.

“Professor Dumbledore’s instructions were to keep the school running as normally as possible,” she said. “And that, I need hardly point out, means finding out how much you have learned this year.”

Harry looked down at the pair of white rabbits he was supposed to be turning into slippers. What had he learned so far this year? He couldn’t seem to think of anything that would be useful in an exam.

Ron looked as though he’d just been told he had to go and live in the Forbidden Forest.

“Can you imagine me taking exams with this?” he asked Harry, holding up his wand, which had just started whistling loudly.

Three days before their first exam, Professor McGonagall made another announcement at breakfast.

“I have good news,” she said, and the Great Hall, instead of falling silent, erupted.

“Dumbledore’s coming back!” several people yelled joyfully.

“You’ve caught the Heir of Slytherin!” squealed a girl at the Ravenclaw table.

“Quidditch matches are back on!” roared Wood excitedly.

コ・マルフォイは喜んではいなかった。

逆にロンは、ここしばらく見せたことがなかったような、嬉しそうな顔をしている。

ハリーもとても嬉しかった。

「それじゃ、マートルに聞きそびれたこともどうでもよかった！目を覚ましたら、たぶんハーマイオニーが全部答えを出してくれるよ！でもね、あと三日で試験が始まるって聞いたら、きっとあいつ気が狂うぜ。復習してないんだからな。試験が終わるまで、今のままそっとしておいた方が親切じゃないかな」

そのとき、ジニー・ウィーズリーがやってきて、ロンの隣に座った。

緊張して落ち着かないようすだ。膝の上で手をもじもじさせているのにハリーは気がついた。

「どうした？」ロンがオートミールのお代わりをしながら聞いた。

ジニーは黙っている。グリフィンドールのテーブルを端から端まで眺めながら、おびえた表情をしている。

どこかで見た表情だとハリーは思ったが、誰の顔か思い出せない。

「言っちゃえよ」ロンがジニーを見つめながら促した。

ハリーは突然、ジニーの表情が誰に似ているか思い出した。椅子に座って、前後に体を揺する仕草がドピーそっくりだ。

言っではいけないことを漏らそうかどうか、ためらっているときのドピーだ。

「あたし、言わなければいけないことがあるの」ジニーはハリーの方を見ないようにしながらボソボソ言った。

「なんなの？」ハリーが聞いた。

ジニーはなんといいのか言葉が見つからない様子だ。

「いったいなんだよ？」とロン。

ジニーは口を開いた。が、声が出てこない。ハリーは少し前かがみになって、ロンとジニ

When the hubbub had subsided, Professor McGonagall said, “Professor Sprout has informed me that the Mandrakes are ready for cutting at last. Tonight, we will be able to revive those people who have been Petrified. I need hardly remind you all that one of them may well be able to tell us who, or what, attacked them. I am hopeful that this dreadful year will end with our catching the culprit.”

There was an explosion of cheering. Harry looked over at the Slytherin table and wasn’t at all surprised to see that Draco Malfoy hadn’t joined in. Ron, however, was looking happier than he’d looked in days.

“It won’t matter that we never asked Myrtle, then!” he said to Harry. “Hermione’ll probably have all the answers when they wake her up! Mind you, she’ll go crazy when she finds out we’ve got exams in three days’ time. She hasn’t studied. It might be kinder to leave her where she is till they’re over.”

Just then, Ginny Weasley came over and sat down next to Ron. She looked tense and nervous, and Harry noticed that her hands were twisting in her lap.

“What’s up?” said Ron, helping himself to more porridge.

Ginny didn’t say anything, but glanced up and down the Gryffindor table with a scared look on her face that reminded Harry of someone, though he couldn’t think who.

“Spit it out,” said Ron, watching her.

Harry suddenly realized who Ginny looked like. She was rocking backward and forward

一だけに聞こえるような小声で言った。

「『秘密の部屋』に関することなの？ 何か見たの？ 誰かおかしい素振りをしているの？」

ジニーはスーッと深呼吸した。その瞬間、折悪しく、パーシー・ウィーズリーがげっそり疲れれきった顔で現れた。

「ジニー、食べ終わったのなら、僕がその席に座るよ。腹ペコだ。巡回見廻りが、今終わったばかりなんだ」

ジニーは椅子に電流が走ったかのように飛び上って、パーシーの方をおびえた目でチラッと見るなり、そそくさと立ち去った。

パーシーは腰を下ろし、テーブルの真ん中にあったマグカップをガバッとつかんだ。

「パーシー！」ロンが怒った。

「ジニーが何か大切なことを話そうとしたとこだったのに！」

紅茶を飲んでいる途中でパーシーは咽せ込んだ。

「どんなことだった？」パーシーが咳込みながら聞いた。

「僕が何かおかしいものを見たのかって聞いたら、何か言いかけてー」

「ああーそれくそれは『秘密の部屋』には関係ない」パーシーはすぐに言った。

「なんでそう言える？」ロンの眉が吊り上がった。

「うん、あ、どうしても知りたいなら、ジニーが、あ、この間、僕とばったり出くわして、そのとき僕がーうん、なんでもないー要するにだ、あの子は僕が何かをするのを見たわけだ。それで、僕が、その、あの子に誰にも言うなって頼んだんだ。あの子は約束を守ると思ったのに。たいしたことじゃないんだ。ほんと。ただ、できれば……」

ハリーは、パーシーがこんなにオロオロするのを初めて見た。

「いったい何をしてたんだ？ パーシー」ロンがニヤニヤした。

slightly in her chair, exactly like Dobby did when he was teetering on the edge of revealing forbidden information.

“I’ve got to tell you something,” Ginny mumbled, carefully not looking at Harry.

“What is it?” said Harry.

Ginny looked as though she couldn’t find the right words.

“What?” said Ron.

Ginny opened her mouth, but no sound came out. Harry leaned forward and spoke quietly, so that only Ginny and Ron could hear him.

“Is it something about the Chamber of Secrets? Have you seen something? Someone acting oddly?”

Ginny drew a deep breath and, at that precise moment, Percy Weasley appeared, looking tired and wan.

“If you’ve finished eating, I’ll take that seat, Ginny. I’m starving, I’ve only just come off patrol duty.”

Ginny jumped up as though her chair had just been electrified, gave Percy a fleeting, frightened look, and scampered away. Percy sat down and grabbed a mug from the center of the table.

“Percy!” said Ron angrily. “She was just about to tell us something important!”

Halfway through a gulp of tea, Percy choked.

“What sort of thing?” he said, coughing.

「さあ、吐けよ。笑わないから」パーシーの方はニコリともしなかった。

「ハリー、パンを取ってくれないか。腹ペコだ」

明日になれば、自分たちが何もしなくても、すべての謎が解けるだろうとハリーは思ったが、マートルと話す機会があるなら逃すつもりはなかった——そして、嬉しいことに、その機会がやってきた。午前の授業も半ば終わり、次の「魔法史」の教室まで引率していたのがギルドロイ・ロックハートだった。

ロックハートはこれまで何度も「危険は去った」と宣言し、そのたびに、たちまちそれがまちがいだと証明されてきたのだが、今回は自信満々で、生徒を安全に送り届けるためにわざわざ廊下を引率して行くのは、まったくのむだだと思っているようだった。

髪もいつものような輝きがなく、五階の見廻りで一晩中起きていた様子だった。

「私の言うことをよく聞いておきなさい」生徒を廊下の曲り角まで引率してきたロックハートが言った。

「哀れにも石にされた人たちが最初に口にする言葉は『ハグリッドだった』です。まったく、マクゴナガル先生が、まだこんな警戒措置が必要だと考えていらっしゃるのには驚きますね」

「その通りです、先生」ハリーがそう言ったので、ロンは驚いて教科書を取り落としたりした。

「どうも、ハリー」ハッフルパフ生が、長い列を作って通り過ぎるのをやり過ごしながら、ロックハートが優雅に言った。

「つまり、私たち、先生というものは、いろいろやらなければならぬことがありますね。いっぱい生徒を送ってクラスに連れて行ったり、一晩中見張りに立ったりしなくたって手一杯ですよ」

「その通りです」ロンがピンと来てうまくつないだ。

「先生、引率はここまでにしてはいかがです

“I just asked her if she’d seen anything odd, and she started to say —”

“Oh — that — that’s nothing to do with the Chamber of Secrets,” said Percy at once.

“How do you know?” said Ron, his eyebrows raised.

“Well, er, if you must know, Ginny, er, walked in on me the other day when I was — well, never mind — the point is, she spotted me doing something and I, um, I asked her not to mention it to anybody. I must say, I did think she’d keep her word. It’s nothing, really, I’d just rather —”

Harry had never seen Percy look so uncomfortable.

“What were you doing, Percy?” said Ron, grinning. “Go on, tell us, we won’t laugh.”

Percy didn’t smile back.

“Pass me those rolls, Harry, I’m starving.”

Harry knew the whole mystery might be solved tomorrow without their help, but he wasn’t about to pass up a chance to speak to Myrtle if it turned up — and to his delight it did, midmorning, when they were being led to History of Magic by Gilderoy Lockhart.

Lockhart, who had so often assured them that all danger had passed, only to be proved wrong right away, was now wholeheartedly convinced that it was hardly worth the trouble to see them safely down the corridors. His hair wasn’t as sleek as usual; it seemed he had been up most of the night, patrolling the fourth

か。あと一つだけ廊下を渡ればいいんですから」

「実はヘウィーズリー君、私もそうしようかと思う。戻って次の授業の準備をしないといけないんでね」

そしてロックハートは足早に行ってしまった。

「授業の準備が聞いてあきれる」ロンがフンと言った。

「髪をカールしに、どうせそんなとこだ」

グリフィンドル生を先に行かせ、二人は脇の通路を駆け下り、「嘆きのマートル」のトイレへと急いだ。

しかし、計略がうまく行ったことを、互いに称え合っていたそのとき……。

「ポッター！ ウィーズリー！ 何をしているのですか！」

マクゴナガル先生が、これ以上固くは結べまいと思うほど固く唇を真一文字に結んで立っていた。

「僕たち——僕たち——」ロンがもごもご言った。

「僕たち、あの——様子を見に」

「ハーマイオニーの」とハリーが受けた。

ロンもマクゴナガル先生もハリーを見つめた。

「先生、もうずいぶん長いことハーマイオニーに会っていません」

ハリーはロンの足を踏んづけながら急いで付け加えた。

「だから、僕たち、こっそり医務室に忍び込んで、それで、ハーマイオニーにマンドレイクがもうすぐ採れるから、だから、あの、心配しないようにって、そう言おうと思ったんです」

マクゴナガル先生はハリーから目を離さなかった。一瞬、ハリーは先生の雷が落ちるかと思った。

しかし、先生の声は奇妙にかすれていた。

floor.

“Mark my words,” he said, ushering them around a corner. “The first words out of those poor Petrified people’s mouths will be ‘*It was Hagrid.*’ Frankly, I’m astounded Professor McGonagall thinks all these security measures are necessary.”

“I agree, sir,” said Harry, making Ron drop his books in surprise.

“Thank you, Harry,” said Lockhart graciously while they waited for a long line of Hufflepuffs to pass. “I mean, we teachers have quite enough to be getting on with, without walking students to classes and standing guard all night. ...”

“That’s right,” said Ron, catching on. “Why don’t you leave us here, sir, we’ve only got one more corridor to go —”

“You know, Weasley, I think I will,” said Lockhart. “I really should go and prepare my next class —”

And he hurried off.

“Prepare his class,” Ron sneered after him. “Gone to curl his hair, more like.”

They let the rest of the Gryffindors draw ahead of them, then darted down a side passage and hurried off toward Moaning Myrtle’s bathroom. But just as they were congratulating each other on their brilliant scheme —

“Potter! Weasley! What are you doing?”

It was Professor McGonagall, and her mouth was the thinnest of thin lines.

“We were — we were —” Ron stammered.

「そうでしょうとも」

ハリーは先生のピーズのような目に、涙がキラリと光るのを見つけて驚いた。

「そうでしょうとも。襲われた人たちの友達が、一番幸い思いをしてきたことでしょう…よくわかりました。ポッター、もちろん、いいですとも。ミス・グレンジャーのお見舞いを許可します。ピンズ先生には、私からあなたたちの欠席のことをお知らせしておきましょう。マダム・ポンフリーには、私から許可が出たと言いなさい」

ハリーとロンは、罰則を与えられなかったことが、半信半疑のままその場を立ち去った。角を曲がったとき、マクゴナガル先生が鼻をかむ音が、はっきり聞こえた。

「あれは、君の作り話の中でも最高傑作だったぜ」ロンが熱を込めて言った。

こうなれば、医務室に行って、マダム・ポンフリーに「マクゴナガル先生から許可をもらって、ハーマイオニーの見舞いにきた」と言うほかはない。

マダム・ポンフリーは二人を中に入れたが、渋々だった。

「石になった人に話しかけてもなんにもならないでしょう」と言われながら、ハーマイオニーのそばの椅子に座ってみると、二人とも「まったくだ」と納得した。

見舞客が来ていることに、ハーマイオニーが全然気づいていないのは明らかだった。

ベッド脇の小机に「心配するな」と話しかけても、効果は同じかもしれない。

「でも、ハーマイオニーが自分を襲ったやつをほんとうに見たと思うかい？」

ロンが、ハーマイオニーの硬直した顔を悲しげに見ながら言った。

「だって、そいつがこっそり忍び寄って襲ったのだったら、誰も見ちゃいないだろう……」

ハリーはハーマイオニーの顔を見てはいなかった。

“We were going to — to go and see —”

“Hermione,” said Harry. Ron and Professor McGonagall both looked at him.

“We haven’t seen her for ages, Professor,” Harry went on hurriedly, treading on Ron’s foot, “and we thought we’d sneak into the hospital wing, you know, and tell her the Mandrakes are nearly ready and, er, not to worry —”

Professor McGonagall was still staring at him, and for a moment, Harry thought she was going to explode, but when she spoke, it was in a strangely croaky voice.

“Of course,” she said, and Harry, amazed, saw a tear glistening in her beady eye. “Of course, I realize this has all been hardest on the friends of those who have been ... I quite understand. Yes, Potter, of course you may visit Miss Granger. I will inform Professor Binns where you’ve gone. Tell Madam Pomfrey I have given my permission.”

Harry and Ron walked away, hardly daring to believe that they’d avoided detention. As they turned the corner, they distinctly heard Professor McGonagall blow her nose.

“That,” said Ron fervently, “was the best story you’ve ever come up with.”

They had no choice now but to go to the hospital wing and tell Madam Pomfrey that they had Professor McGonagall’s permission to visit Hermione.

Madam Pomfrey let them in, but reluctantly.

“There’s just no *point* talking to a Petrified

撫でていた右手の方に興味を持った。

かがみ込んでよく見ると、毛布の上で固く結んだ右手の拳に、くしゃくしゃになった紙切れを握り締めている。

マダム・ポンフリーが、そのあたりにいないことを確認してから、ハリーはロンに、そのことを教えた。

「なんとか取り出してみて」ロンは椅子を動かし、ハリーがマダム・ポンフリーの目に触れないように遮りながらささやいた。

簡単には行かない。

ハーマイオニーの手が紙切れをガツチリ握り締めているので、ハリーは紙を破いてしまいそうだった。

ロンを見張りに立て、ハリーは引っ張ったり、捻ったり、緊張の数分の後、やっと紙を引っ張り出した。

図書館の、とても古い本のページがちぎり取られていた。

ハリーは紐を伸ばすのももどかしく、ロンもかがみ込んで一緒に読んだ。

我らが世界を徘徊する多くの怪獣、怪物の中でも、最も珍しく、

最も破壊的であるという点で、バジリスクの右に出るものはない。

『毒蛇の王』とも呼ばれる。

この蛇は巨大に成長することがあり、何百年も生き長らえることがある。

鶏の卵から生まれ、ヒキガエルの腹の下で醇化される。

殺しの方法は非常に珍しく、毒牙による殺傷とは別に、バジリスクの一にらみは致命的である。

その眼からの光線に捕われた者は即死する。

蜘蛛が逃げ出すのはバジリスクが来る前触れである。

なぜならバジリスクは蜘蛛の宿命の天敵だ

person,” she said, and they had to admit she had a point when they’d taken their seats next to Hermione. It was plain that Hermione didn’t have the faintest inkling that she had visitors, and that they might just as well tell her bedside cabinet not to worry for all the good it would do.

“Wonder if she did see the attacker, though?” said Ron, looking sadly at Hermione’s rigid face. “Because if he sneaked up on them all, no one’ll ever know. ...”

But Harry wasn’t looking at Hermione’s face. He was more interested in her right hand. It lay clenched on top of her blankets, and bending closer, he saw that a piece of paper was scrunched inside her fist.

Making sure that Madam Pomfrey was nowhere near, he pointed this out to Ron.

“Try and get it out,” Ron whispered, shifting his chair so that he blocked Harry from Madam Pomfrey’s view.

It was no easy task. Hermione’s hand was clamped so tightly around the paper that Harry was sure he was going to tear it. While Ron kept watch he tugged and twisted, and at last, after several tense minutes, the paper came free.

It was a page torn from a very old library book. Harry smoothed it out eagerly and Ron leaned close to read it, too.

Of the many fearsome beasts and monsters that roam our land, there is none more curious

からである。

バジリスクにとって致命的なのは雄鶏が時をつくる声で、唯一それからは逃げ出す。

この下に、ハリーには見覚えのあるハーマイオニーの筆跡で、一言だけ書かれていた。

「パイプ」

まるでハリーの頭の中で、誰かが電灯をパチンと点けたようだった。

「ロン」ハリーが声をひそめて言った。

「これだ。これが答えだ。『秘密の部屋』の怪物はバジリスク——巨大な毒蛇だ！だから僕があちこちでその声を聞いたんだ。他の人には聞こえなかったのは、僕は蛇語がわかるからなんだ……」

ハリーは周りのベッドを見回した。「バジリスクは視線で人を殺す。でも誰も死んではない。それは、誰も直接目を見ていないからなんだ。コリンはカメラを通して見た。バジリスクが中のフィルムを焼き切ったけど、コリンは石になっただけだ。ジャスティン——ジャスティンは『ほとんど首無しニック』を通して見たに違いない！ニックはまともに光線を浴びたけど、二回は死ねない……。ハーマイオニーとレイブンクローの監督生が見つかったとき、そばに鏡が落ちていた。ハーマイオニーは、怪物がバジリスクだってきつと気づいたんだ。絶対まちがいないと思うけど、最初に出会った女子学生に、どこか角を曲がるときには、まず最初に鏡を見るようになって、きつと忠告したんだ！そしてその学生が鏡を取り出して——そしたら——」

ロンは口をポカンと開けていた。

「それじゃ、ミセス・ノリスは？」ロンが小声で急き込んで聞いた。

ハリーは考え込んだ。ハロウィーンの夜の場面を頭に描いてみた。

「水だ…！」ハリーがゆっくりと答えた。

「『嘆きのマートル』のトイレから水が溢れてた。ミセス・ノリスは水に映った姿を見た

or more deadly than the Basilisk, known also as the King of Serpents. This snake, which may reach gigantic size and live many hundreds of years, is born from a chicken's egg, hatched beneath a toad. Its methods of killing are most wondrous, for aside from its deadly and venomous fangs, the Basilisk has a murderous stare, and all who are fixed with the beam of its eye shall suffer instant death. Spiders flee before the Basilisk, for it is their mortal enemy, and the Basilisk flees only from the crowing of the rooster, which is fatal to it.

And beneath this, a single word had been written, in a hand Harry recognized as Hermione's. *Pipes.*

It was as though somebody had just flicked a light on in his brain.

“Ron,” he breathed. “This is it. This is the answer. The monster in the Chamber's a *basilisk* — a giant serpent! *That's* why I've been hearing that voice all over the place, and nobody else has heard it. It's because I understand Parseltongue. ...”

Harry looked up at the beds around him.

“The basilisk kills people by looking at them. But no one's died — because no one looked it straight in the eye. Colin saw it through his camera. The basilisk burned up all the film inside it, but Colin just got Petrified. Justin ... Justin must've seen the basilisk through Nearly Headless Nick! Nick got the full blast of it, but he couldn't die *again* ... and Hermione and that Ravenclaw prefect were

だけなんだ……」

手に持った紙切れに、ハリーはもう一度、食い入るように目を通した。

読めば読むほど辻褄が合ってくる。「致命的なのは、雄鶏が時をつくる声」ハリーは読み上げた。

「ハグリッドの雄鶏が殺された! 『秘密の部屋』が開かれたからには、『スリザリンの継承者』は城の周辺に、雄鶏がいてほしくない。『蜘蛛が逃げ出すのは前触れ!』何もかもピッタリだ!」

「だけど、バジリスクはどうやって城の中を動き回っていたんだろう?」ロンは呟いた。

「とんでもない大蛇だし……誰かに見つかりそうな……」

「パイプだ」ハリーが言った。

「パイプだよ……ロン、やつは配管を使ってたんだ。僕には壁の中からあの声が聞こえてた」

ロンは突如ハリーの腕をつかんだ。「『秘密の部屋』への入口だ!」ロンの声がかすれている。

「もしトイレの中だったら! もし、あのー」

「ー『嘆きのマートル』のトイレだったら!」とハリーが続けた。信じられないような話だった。

体中を興奮が走り、二人はそこにじっと座っていた。

「……ということは」ハリーが口を開いた。

「この学校で蛇語を話せるのは、僕だけじゃないはずだ。『スリザリンの継承者』も話せる。そうやってバジリスクを操ってきたんだ」

「これからどうする!」ロンの目が輝いている。

「すぐにマクゴナガルのところへ行こうか?」

「職員室へ行こう」ハリーが弾けるように立

found with a mirror next to them. Hermione had just realized the monster was a basilisk. I bet you anything she warned the first person she met to look around corners with a mirror first! And that girl pulled out her mirror — and —”

Ron’s jaw had dropped.

“And Mrs. Norris?” he whispered eagerly.

Harry thought hard, picturing the scene on the night of Halloween.

“The water …” he said slowly. “The flood from Moaning Myrtle’s bathroom. I bet you Mrs. Norris only saw the reflection. …”

He scanned the page in his hand eagerly. The more he looked at it, the more it made sense.

“... *The crowing of the rooster ... is fatal to it!*” he read aloud. “Hagrid’s roosters were killed! The Heir of Slytherin didn’t want one anywhere near the castle once the Chamber was opened! *Spiders flee before it!* It all fits!”

“But how’s the basilisk been getting around the place?” said Ron. “A giant snake ... Someone would’ve seen ...”

Harry, however, pointed at the word Hermione had scribbled at the foot of the page.

“Pipes,” he said. “Pipes ... Ron, it’s been using the plumbing. I’ve been hearing that voice inside the walls. ...”

Ron suddenly grabbed Harry’s arm.

“The entrance to the Chamber of Secrets!” he said hoarsely. “What if it’s a bathroom?”

ち上がった。

「あと十分で、マクゴナガル先生が戻ってくるはずだ。まもなく休憩時間だ」

二人は階段を下りた。どこかの廊下でぐずぐずしているところを、また見つかったりしないよう、まっすぐに誰もいない職員室に行った。広い壁を羽目板飾りにした部屋には、黒っぽい木の椅子がたくさんあった。ハリーとロンは興奮で座る気になれず、室内を往ったり来たりして待った。

ところが休憩時間のベルが鳴らない。かわりに、マクゴナガル先生の声が魔法で拡声され廊下に響き渡った。

「生徒は全員、それぞれの寮にすぐに戻りなさい。教師は全員、職員室に大至急お集まりください」

ハリーはクルッと振り向き、ロンと目を見合わせた。

「また襲われたのか！ 今になって！」

「どうしよう？」ロンが愕然として言った。

「寮に戻ろうか？」

「いや」ハリーは素早く周りを見回した。

左側に、やばったい洋服掛けがあって、先生方のマントがぎっしり詰まっていた。

「さあ、この中に。いったい何が起こったのか聞こう。それから僕たちの発見したことを話そう」

二人はその中に隠れて、頭の上を何百人という人が、ガタガタと移動する音を聞いている。

やがて職員室のドアがバタンと開いた。微臭いマントの袋の間から覗くと、先生方が次々と部屋に入ってくるのが見えた。

当惑した顔、おびえきった顔。やがて、マクゴナガル先生がやってきた。

「とうとう起こりました」シンと静まった職員室でマクゴナガル先生が話し出した。

「生徒が一人、怪物に連れ去られました。『秘密の部屋』そのものの中へです」

What if it's in —”

“— *Moaning Myrtle's bathroom*,” said Harry.

They sat there, excitement coursing through them, hardly able to believe it.

“This means,” said Harry, “I can't be the only Parselmouth in the school. The Heir of Slytherin's one, too. That's how he's been controlling the basilisk.”

“What're we going to do?” said Ron, whose eyes were flashing. “Should we go straight to McGonagall?”

“Let's go to the staffroom,” said Harry, jumping up. “She'll be there in ten minutes. It's nearly break.”

They ran downstairs. Not wanting to be discovered hanging around in another corridor, they went straight into the deserted staffroom. It was a large, paneled room full of dark, wooden chairs. Harry and Ron paced around it, too excited to sit down.

But the bell to signal break never came.

Instead, echoing through the corridors came Professor McGonagall's voice, magically magnified.

“All students to return to their House dormitories at once. All teachers return to the staffroom. Immediately, please.”

Harry wheeled around to stare at Ron.

“Not another attack? Not now?”

“What'll we do?” said Ron, aghast. “Go back to the dormitory?”

フリットウィック先生が思わず悲鳴をあげた。スプラウト先生は口を手で覆った。

スネイプは椅子の背をぎゅっと握り締め、「なぜそんなにはっきり言えるのかな？」と聞いた。

「『スリザリンの継承者』がまた伝言を書き残しました」マクゴナガル先生は蒼白な顔で答えた。

「最初に残された文字のすぐ下にです。『彼女の白骨は永遠に『秘密の部屋』に横たわるであろう』」

フリットウィック先生はワッと泣き出した。

「誰ですか！」腰が抜けたように、椅子にへたり込んだマダム・フーチが聞いた。

「どの子ですか？」

「ジニー・ウィーズリー」マクゴナガル先生が言った。

ハリーは隣で、ロンが声もなくへなへたと崩れ落ちるのを感じた。

「全校生徒を明日、帰宅させなければなりません」マクゴナガル先生だ。

「ホグワーツはこれでおしまいです。ダンブルドアはいつもおっしゃっていた……」

職員室のドアがもう一度ボタンと開いた。一瞬ドキリとして、ハリーはダンブルドアに違いないと思った。

しかし、それはロックハートだった。ニッコリ微笑んでいるではないか。

「大変失礼しましたーついウトウトとー何か聞き逃してしまいましたか？」

先生方が、どう見ても憎しみとしかいえない目つきで、ロックハートを見ていることにも気づかないらしい。

スネイプが一歩進み出た。「なんと、適任者が」スネイプが言った。

「まさに適任だ。ロックハート、女子学生が怪物に泣致された。『秘密の部屋』そのものに連れ去られた。いよいよあなたの出番が来ましたぞ」

“No,” said Harry, glancing around. There was an ugly sort of wardrobe to his left, full of the teachers’ cloaks. “In here. Let’s hear what it’s all about. Then we can tell them what we’ve found out.”

They hid themselves inside it, listening to the rumbling of hundreds of people moving overhead, and the staffroom door banging open. From between the musty folds of the cloaks, they watched the teachers filtering into the room. Some of them were looking puzzled, others downright scared. Then Professor McGonagall arrived.

“It has happened,” she told the silent staffroom. “A student has been taken by the monster. Right into the Chamber itself.”

Professor Flitwick let out a squeal. Professor Sprout clapped her hands over her mouth. Snape gripped the back of a chair very hard and said, “How can you be sure?”

“The Heir of Slytherin,” said Professor McGonagall, who was very white, “left another message. Right underneath the first one. ‘*Her skeleton will lie in the Chamber forever.*’ ”

Professor Flitwick burst into tears.

“Who is it?” said Madam Hooch, who had sunk, weak-kneed, into a chair. “Which student?”

“Ginny Weasley,” said Professor McGonagall.

Harry felt Ron slide silently down onto the wardrobe floor beside him.

“We shall have to send all the students

ロックハートは血の気が引いた。

「その通りだわ、ギルデロイ」スプラウト先生が口を挟んだ。

「昨夜でしたね、たしか、『秘密の部屋』への入口がどこにあるか、とっくに知っているとおっしゃったのは？」

「私は——その、私は——」ロックハートはわけのわからない言葉を口走った。

「そうですとも、『部屋』の中に何がいるか知っていると、自信たっぷりにわたしに話ませんでしたか？」

フリットウィック先生が口を挟んだ。

「い、言いましたか！ 覚えていませんが……」

「我輩はたしかに覚えておりますぞ。ハグリッドが捕まる前にへ自分が怪物と対決するチャンスがなかったのは、残念だとかおっしゃいましたな」スネイプが言った。

「何もかも不手際だった、最初から、自分の好きなようにやらせてもらうべきだったとか？」弧ロックハートは石のように非情な先生方の顔を見つめた。

「私は……何もそんな……あなたの誤解では……」

「それでは、ギルデロイ、あなたにお任せしましょう」マクゴナガル先生が言った。

「今夜こそ絶好のチャンスでしょう。誰にもあなたの邪魔をさせはしませんとも。お一人で怪物と取り組むことができますよ。お望み通り、お好きなように」

ロックハートは絶望的な目で周りをジーツと見つめていたが、誰も助け舟を出さなかった。

今のロックハートはハンサムからは程遠かった。唇はワナワナ震え、歯を輝かせたいつものニッコリが消えた顔は、うらなり瓢箪のようだった。

「よ、よろしい」ロックハートが言った。

「へ、部屋に戻って、し——支度をします」

home tomorrow,” said Professor McGonagall. “This is the end of Hogwarts. Dumbledore always said …”

The staffroom door banged open again. For one wild moment, Harry was sure it would be Dumbledore. But it was Lockhart, and he was beaming.

“So sorry — dozed off — what have I missed?”

He didn’t seem to notice that the other teachers were looking at him with something remarkably like hatred. Snape stepped forward.

“Just the man,” he said. “The very man. A girl has been snatched by the monster, Lockhart. Taken into the Chamber of Secrets itself. Your moment has come at last.”

Lockhart blanched.

“That’s right, Gilderoy,” chipped in Professor Sprout. “Weren’t you saying just last night that you’ve known all along where the entrance to the Chamber of Secrets is?”

“I — well, I —” sputtered Lockhart.

“Yes, didn’t you tell me you were sure you knew what was inside it?” piped up Professor Flitwick.

“D-did I? I don’t recall —”

“I certainly remember you saying you were sorry you hadn’t had a crack at the monster before Hagrid was arrested,” said Snape. “Didn’t you say that the whole affair had been bungled, and that you should have been given a free rein from the first?”

Lockhart stared around at his stony-faced

ロックハートが出て行った。

「さてと」マクゴナガル先生は鼻の穴を膨らませて言った。

「これで厄介払いができました。寮監の先生方は寮に戻り、生徒に何が起こったかを知らせてください。明日一番のホグワーツ特急で生徒を帰宅させる、とおっしゃってください。他の先生方は、生徒が一人たりとも寮の外に残っていないよう見廻ってください」

先生たちは立ち上がり、一人また一人と出て行った。

その日は、ハリーの生涯で最悪の日だったかもしれない。

ロン、フレッド、ジョージたちとグリフィンドールの談話室の片隅に腰掛け、互いに押し黙っていた。

パーシーはそこにはいなかった。ウィーズリーおじさん、おばさんにふりろう便を飛ばしに行ったあと、自分の部屋に閉じこもってしまった。

午後の時間が、こんなに長かったことは今までかつてなく、これほど混み合っているグリフィンドールの談話室が、こんなに静かだったことも、今までかつてなかった。

日没近く、フレッドとジョージは、そこにじっとしていることがたまらなりなって、寝室に上がって行った。

「ジニーは何か知っていたんだよ、ハリー」職員室の洋服掛けに隠れて以来、初めてロンが口をきいた。

「だから連れて行かれたんだ。パーシーのカバカしい何かの話じゃなかったんだ。何か『秘密の部屋』に関することを見つけたんだ。きっとそのせいでジニーは——」

ロンは激しく目をこすった。

「だって、ジニーは純血だ。他に理由があるはずがない」

ハリーは夕日を眺めた。地平線の下に血のように赤い太陽が沈んでいく——最悪だ。

こんなに落ち込んだことはない。何かできな

colleagues.

“I — I really never — you may have misunderstood —”

“We’ll leave it to you, then, Gilderoy,” said Professor McGonagall. “Tonight will be an excellent time to do it. We’ll make sure everyone’s out of your way. You’ll be able to tackle the monster all by yourself. A free rein at last.”

Lockhart gazed desperately around him, but nobody came to the rescue. He didn’t look remotely handsome anymore. His lip was trembling, and in the absence of his usually toothy grin, he looked weak-chinned and feeble.

“V-very well,” he said. “I’ll — I’ll be in my office, getting — getting ready.”

And he left the room.

“Right,” said Professor McGonagall, whose nostrils were flared, “that’s got *him* out from under our feet. The Heads of Houses should go and inform their students what has happened. Tell them the Hogwarts Express will take them home first thing tomorrow. Will the rest of you please make sure no students have been left outside their dormitories.”

The teachers rose and left, one by one.

It was probably the worst day of Harry’s entire life. He, Ron, Fred, and George sat together in a corner of the Gryffindor common room, unable to say anything to each other. Percy wasn’t there. He had gone to send an owl

いのか……なんでもいいー

「ハリー」ロンが話しかけた。

「ほんのわずかでも可能性があるだろうか。
つまりージニーがまだー」

ハリーはなんと答えてよいかわからなかった。
ジニーがまだ生きているとは到底思えない。

「そうだ！ ロックハートに会いに行くべきじゃないかな？」ロンが言った。

「僕たちの知っていることを教えてやるんだ。
ロックハートはなんとかして『秘密の部屋』に入ろうとしているんだ。それがどこにあるか、
僕たちの考えを話して、バジリスクがそこにいるって、教えてあげよう」

他にいい考えも思いつかなかったし、とにかく何かしたいという思いで、ハリーは、ロンの考えに賛成した。

談話室にいたグリフィンボール生は、すっかり落ち込み、ウィーズリー兄弟が気の毒で何も言えず、二人が立ち上がっても止めようとしなかったし、二人が談話室を横切り、肖僕画の出入口から出て行くのを、誰も止めはしなかった。

ロックハートの部屋に向かって歩くうちにあたりが闇に包まれはじめた。

ロックハートの部屋の中は取り込み中らしい。カリカリ、ゴツンゴツンに加えて慌しい足音が聞こえた。

ハリーがノックすると、中が急に静かになった。それからドアがほんの少しだけ開き、ロックハートの目が覗いた。

「あぁ……ポッター君……ウィーズリー君……」
ドアがまたほんのわずか開いた。

「私は今、少々取り込み中なので、急いでくると……」

「先生、僕たち、お知らせしたいことがあるんです」とハリーが言った。

「先生のお役に立つと思うんです」

「あー——いやー——今はあまり都合がー」
やっと見える程度のロックハートの横顔が、

to Mr. and Mrs. Weasley, then shut himself up in his dormitory.

No afternoon ever lasted as long as that one, nor had Gryffindor Tower ever been so crowded, yet so quiet. Near sunset, Fred and George went up to bed, unable to sit there any longer.

“She knew something, Harry,” said Ron, speaking for the first time since they had entered the wardrobe in the staffroom. “That’s why she was taken. It wasn’t some stupid thing about Percy at all. She’d found out something about the Chamber of Secrets. That must be why she was —” Ron rubbed his eyes frantically. “I mean, she was a pureblood. There can’t be any other reason.”

Harry could see the sun sinking, blood-red, below the skyline. This was the worst he had ever felt. If only there was something they could do. Anything.

“Harry,” said Ron. “D’you think there’s any chance at all she’s not — you know —”

Harry didn’t know what to say. He couldn’t see how Ginny could still be alive.

“D’you know what?” said Ron. “I think we should go and see Lockhart. Tell him what we know. He’s going to try and get into the Chamber. We can tell him where we think it is, and tell him it’s a basilisk in there.”

Because Harry couldn’t think of anything else to do, and because he wanted to be doing something, he agreed. The Gryffindors around them were so miserable, and felt so sorry for the Weasleys, that nobody tried to stop them as

非常に迷惑そうだった。

「つまり——いや——いいでしょう」

ロックハートはドアを開け、二人は中に入った。

部屋の中はほとんどすべて取りかたづけられていた。

床には大きなトランクが二個置いてあり、片方にはローブが、窮翠色、藤色、群青色など、慌ててたたんで突っ込んであり、もう片方には本がごちゃ混ぜに放り込まれていた。

壁いっぱいに飾られていた写真は、今や机の上にいくつか置かれた箱に押し込まれていた。

「どこかへいらっしゃるのですか？」ハリーが聞いた。

「うー、あー、そう」ロックハートはドアの裏側から箒身大の自分のポスターを卦ぎ取り、丸めながらしゃべった。

「緊急に呼び出されて……しかたなく……行かなければ……」

「僕の妹はどうなるんですか？」ロンが愕然として言った。

「そう、そのことだが——まったく気の毒なことだ」

ロックハートは二人の目を見ないようにし、引き出しをグイと開け、中のものを引っくり返してバッグに入れながら言った。

「誰よりもわたしが一番残念に思っている——」

「『闇の魔術に対する防衛術』の先生じゃありませんか！」ハリーが言った。

「こんなときにここから出て行けないでしょう！ これだけの闇の魔術がここで起こっているというのに！」

「いや、しかしですね……私がこの仕事を引き受けたときは……」

ロックハートは今度はソックスをローブの上に積み上げながら、もそもそ言った。

「職務内容には何も……こんなことは予想だ

they got up, crossed the room, and left through the portrait hole.

Darkness was falling as they walked down to Lockhart's office. There seemed to be a lot of activity going on inside it. They could hear scraping, thumps, and hurried footsteps.

Harry knocked and there was a sudden silence from inside. Then the door opened the tiniest crack and they saw one of Lockhart's eyes peering through it.

“Oh — Mr. Potter — Mr. Weasley —” he said, opening the door a bit wider. “I'm rather busy at the moment — if you would be quick —”

“Professor, we've got some information for you,” said Harry. “We think it'll help you.”

“Er — well — it's not terribly —” The side of Lockhart's face that they could see looked very uncomfortable. “I mean — well — all right —”

He opened the door and they entered.

His office had been almost completely stripped. Two large trunks stood open on the floor. Robes, jade-green, lilac, midnight-blue, had been hastily folded into one of them; books were jumbled untidily into the other. The photographs that had covered the walls were now crammed into boxes on the desk.

“Are you going somewhere?” said Harry.

“Er, well, yes,” said Lockhart, ripping a life-size poster of himself from the back of the door as he spoke and starting to roll it up. “Urgent call — unavoidable — got to go —”

に……」

「先生、逃げ出すっておっしゃるんですか！」ハリーは信じられなかった。

「本に書いてあるように、あんなにいろいろなことをなされた先生が！」

「本は誤解を招く」ロックハートは微妙な言い方をした。

「ご自分が書かれたのに！」ハリーが叫んだ。

「まあまあ坊や」ロックハートが背筋を伸ばし、顔をしかめてハリーを見た。

「ちょっと考えればわかることだ。

私の本があんなに売れるのは、中に書かれていることを全部私がやったと思うからでね。

もしアルメニアの醜い魔法戦士の話だったら、たとえ狼男から村を救ったのがその人でも、本は半分も売れなかったはずですよ。

本人が表紙を飾ったら、とても見られたものじゃない。バンドンの泣き妖怪を追い払った魔女は兎口(みつくち)だった。ファッション感覚ゼロだ。要するにそんなものですよ……」

「それじゃ、先生は、他のたくさんの人たちのやった仕事を、自分の手柄になされたんですか？」ハリーはとても信じる気になれなかった。

「ハリーよ、ハリー」

ロックハートはじれったそうに首を振った。

「そんなに単純なものではない。仕事はしましたよ。まずそういう人たちを探し出す。どうやって仕事をやり遂げたのかを聞き出す。それから『忘却術』をかける。するとその人たちは自分がやった仕事のことを忘れる。私が自慢できるものがあるとすれば、『忘却術』ですね。ハリー、大変な仕事ですよ。本にサインをしたり、広告写真を撮ったりすればすむわけではないんですよ。有名になりたいければ、倦まず弛まず、長く幸い道のりを歩む覚悟が要る」

ロックハートはトランクを全部バチンと締め、鍵を掛けた。

“What about my sister?” said Ron jerkily.

“Well, as to that — most unfortunate —” said Lockhart, avoiding their eyes as he wrenched open a drawer and started emptying the contents into a bag. “No one regrets more than I —”

“You’re the Defense Against the Dark Arts teacher!” said Harry. “You can’t go now! Not with all the Dark stuff going on here!”

“Well — I must say — when I took the job —” Lockhart muttered, now piling socks on top of his robes. “nothing in the job description — didn’t expect —”

“You mean you’re *running away*?” said Harry disbelievingly. “After all that stuff you did in your books —”

“Books can be misleading,” said Lockhart delicately.

“You wrote them!” Harry shouted.

“My dear boy,” said Lockhart, straightening up and frowning at Harry. “Do use your common sense. My books wouldn’t have sold half as well if people didn’t think *I’d* done all those things. No one wants to read about some ugly old Armenian warlock, even if he did save a village from werewolves. He’d look dreadful on the front cover. No dress sense at all. And the witch who banished the Bandon Banshee had a hairy chin. I mean, come on —”

“So you’ve just been taking credit for what a load of other people have done?” said Harry incredulously.

“Harry, Harry,” said Lockhart, shaking his

「さてと。これで全部でしょう。いや、一つだけ残っている」

ロックハートは杖を取り出し、二人に向けた。

「坊ちゃんたちには気の毒ですがね、『忘却術』をかけさせてもらいますよ。私の秘密をベラベラそこら中でしゃべったりされたら、もう本が、一冊も売れなくなりますからね…」

ハリーは自分の杖に手を掛けた。間一髪、ロックハートの杖が振り上げられる直前に、ハリーが大声で叫んだ。

「エクスペリアームズ！<武器よ去れ>」

ロックハートは後ろに吹っ飛んで、トランクに足をすくわれ、その上に倒れた。

杖は高々と空中に弧を描き、それをロンがキャッチし、窓から外に放り投げた。

「スネイプ先生にこの術を教えさせたのが、まちがいでしたね」

ハリーは、ロックハートのトランクを脇の方に蹴飛ばしながら、激しい口調で言った。ロックハートは、また弱々しい表情に戻ってハリーを見上げていた。ハリーは、ロックハートに杖を突きつけたままだった。

「私に何をしろと言うのかね？」ロックハートが力なく言った。

「『秘密の部屋』がどこにあるかも知らない。私には何もできない」

「運のいい人だ」ハリーは杖を突きつけてロックハートを立たせながら言った。

「僕たちはそのありかを知っていると思う。中に何がいるかも。さあ、行こう」

ロックハートを退いたてるようにして部屋を出て、一番近い階段を下り、例の文字が闇の中に光る、暗い廊下を通り、三人は「嘆きのマートル」の女子トイレの入口にたどり着いた。

まずロックハートを先に人らせた。

ロックハートが震えているのを、ハリーはい

head impatiently, “it’s not nearly as simple as that. There was work involved. I had to track these people down. Ask them exactly how they managed to do what they did. Then I had to put a Memory Charm on them so they wouldn’t remember doing it. If there’s one thing I pride myself on, it’s my Memory Charms. No, it’s been a lot of work, Harry. It’s not all book signings and publicity photos, you know. You want fame, you have to be prepared for a long hard slog.”

He banged the lids of his trunks shut and locked them.

“Let’s see,” he said. “I think that’s everything. Yes. Only one thing left.”

He pulled out his wand and turned to them.

“Awfully sorry, boys, but I’ll have to put a Memory Charm on you now. Can’t have you blabbing my secrets all over the place. I’d never sell another book —”

Harry reached his wand just in time. Lockhart had barely raised his, when Harry bellowed, “*Expelliarmus!*”

Lockhart was blasted backward, falling over his trunk; his wand flew high into the air; Ron caught it, and flung it out of the open window.

“Shouldn’t have let Professor Snape teach us that one,” said Harry furiously, kicking Lockhart’s trunk aside. Lockhart was looking up at him, feeble once more. Harry was still pointing his wand at him.

“What d’you want me to do?” said Lockhart weakly. “I don’t know where the Chamber of

い気味だと思った。

「嘆きのマートル」は、一番奥の小部屋のトイレの水槽に座っていた。

「アラ、あんただったの」ハリーを見るなりマートルが言った。

「今度はなんの用？」

「君が死んだときの様子を聞きたいんだ」

マートルはたちまち顔つきが変わった。こんなに誇らしく、嬉しい質問をされたことがないという顔をした。

「オオオオウ、怖かったわ」マートルはたっぷり味わうように言った。

「まさにここだったの。この小部屋で死んだのよ。よく覚えてるわ。オリーブ・ホーンピーがわたしのメガネのことをからかったものだから、ここに隠れたの。鍵を掛けて泣いていたら、誰かが入ってきたわ。何か変なことを言ってた。外国語だったと思うわ。とにかく、いやだったのは、しゃべってるのが男子だったってこと。だから、出ていけ、男子トイレを使えって言うつもりで、鍵を開けて、そして——」マートルは偉そうにそっくり返って、顔を輝かせた。

「死んだの」

「どうやって？」ハリーが聞いた。

「わからない」マートルがヒソヒソ声になった。

「覚えてるのは大きな黄色い目玉が二つ。体全体がギュッと金縛りにあったみたいで、それからふーっと浮いて……」

マートルは夢見るようにハリーを見た。

「そして、また戻ってきたの。だって、オリーブ・ホーンピーに取っ想いてやるって固く決めてたから。ああ、オリーブったら、わたしのメガネを笑ったこと後悔してたわ」

「その目玉、正確にいうとどこで見たの？」とハリーが聞いた。

「あのあたり」マートルは小部屋の前の、手洗い台のあたりを漠然と指差した。

Secrets is. There's nothing I can do.”

“You're in luck,” said Harry, forcing Lockhart to his feet at wandpoint. “We think we know where it is. *And* what's inside it. Let's go.”

They marched Lockhart out of his office and down the nearest stairs, along the dark corridor where the messages shone on the wall, to the door of Moaning Myrtle's bathroom.

They sent Lockhart in first. Harry was pleased to see that he was shaking.

Moaning Myrtle was sitting on the tank of the end toilet.

“Oh, it's you,” she said when she saw Harry. “What do you want this time?”

“To ask you how you died,” said Harry.

Myrtle's whole aspect changed at once. She looked as though she had never been asked such a flattering question.

“Ooooh, it was dreadful,” she said with relish. “It happened right in here. I died in this very stall. I remember it so well. I'd hidden because Olive Hornby was teasing me about my glasses. The door was locked, and I was crying, and then I heard somebody come in. They said something funny. A different language, I think it must have been. Anyway, what really got me was that it was a *boy* speaking. So I unlocked the door, to tell him to go and use his own toilet, and then ——” Myrtle swelled importantly, her face shining. “I *died*.”

“How?” said Harry.

“No idea,” said Myrtle in hushed tones. “I

ハリーとロンは急いで手洗い台に近寄った。ロックハートは顔中に恐怖の色を浮かべて、ずっと後ろの方に下がっていた。

普通の手洗い台と変わらないように見えた。二人は隅々まで調べた。

内側、外側、下のパイプの果てまで。そして、ハリーの目に入ったのは――鋼製の蛇口の脇のところに、引っ搔いたような小さなへどの形が彫ってある。

「その蛇口、壊れっぱなしよ」ハリーが蛇口を捻ろうとすると、マートルが機嫌よく言った。

「ハリー、何か言ってみろよ。何かを蛇語で」ロンが言った。

「でも」ハリーは必死で考えた。

なんとか蛇語が話せたのは、本物のヘビに向かっていているときだけだった。

小さな彫物をじっと見つめて、ハリーはそれが本物であると想僕してみた。

「開け」

ロンの顔を見ると、首を横に振っている。

「普通の言葉だよ」

ハリーはもう一度ヘビを見た。本物のヘビだと思い込もうとした。首を動かしてみると、蠟燭の明りで、彫物が動いているように見えた。

『深け』もう一度言った。

言っただけの言葉は聞こえてこなかった。かわりに奇妙なシューシューという音が、口から出た。そして、蛇口が眩い白い光を放ち、回りはじめた。次の瞬間、手洗い台が動き出した。

手洗い台が沈み込み、見る見る消え去ったあとに、太いパイプがむき出しになった。

大人一人が滑り込めるほどの太さだ。

ハリーはロンが息を呑む声で、再び目を上げた。

何をすべきか、もうハリーの心は決まっていた。「僕はここを降りて行く」ハリーが言っ

just remember seeing a pair of great, big, yellow eyes. My whole body sort of seized up, and then I was floating away. ...” She looked dreamily at Harry. “And then I came back again. I was determined to haunt Olive Hornby, you see. Oh, she was sorry she’d ever laughed at my glasses.”

“Where exactly did you see the eyes?” said Harry.

“Somewhere there,” said Myrtle, pointing vaguely toward the sink in front of her toilet.

Harry and Ron hurried over to it. Lockhart was standing well back, a look of utter terror on his face.

It looked like an ordinary sink. They examined every inch of it, inside and out, including the pipes below. And then Harry saw it: Scratched on the side of one of the copper taps was a tiny snake.

“That tap’s never worked,” said Myrtle brightly as he tried to turn it.

“Harry,” said Ron. “Say something. Something in Parseltongue.”

“But —” Harry thought hard. The only times he’d ever managed to speak Parseltongue were when he’d been faced with a real snake. He stared hard at the tiny engraving, trying to imagine it was real.

“Open up,” he said.

He looked at Ron, who shook his head.

“English,” he said.

Harry looked back at the snake, willing himself to believe it was alive. If he moved his

た。行かないではいられない。

「秘密の部屋」への入口が見つかった以上、ほんのわずかな、かすかな可能性でも、ジニーがまだ生きているかもしれない以上、行かなければ。

「僕も行く」ロンが言った。

一瞬の空白があった。

「さて、私はほとんど必要ないようですね」ロックハートが、得意のスマイルの残骸のような笑いを浮かべた。

「私はこれで――」

ロックハートがドアの取っ手に手を掛けたが、ロンとハリーが、同時に杖をロックハートに向けた。

「先に降りるんだ」ロンが凄んだ。

顔面蒼白で杖もなく、ロックハートはパイプの入口に近づいた。

「君たち」ロックハートは弱々しい声で言った。

「ねえ、君たち、それがなんの役に立つというんだね？」

ハリーはロックハートの背中を杖で小突いた。

ロックハートは足をパイプに滑り込ませた。

「ほんとうになんの役にも――」ロックハートがまた言いかけたが、ロンが押したので、ロックハートは滑り落ちて見えなくなった。

すぐあとにハリーが続いた。ゆっくりとパイプの中に入り込み、それから手を放した。

ちょうど、果てしのない、ぬるぬるした暗い滑り台を急降下していくようだった。あちこち四方八方に枝分かれしているパイプが見えたが、自分たちが降りて行くパイプより太いものはない。

そのパイプは曲がりくねりながら、下に向かって急勾配で続いている。ハリーは学校の下を深く、地下牢よりも一層深く落ちて行くのがわかった。

あとから来るロンがカーブを通るたびにドス

head, the candlelight made it look as though it were moving.

“Open up,” he said.

Except that the words weren't what he heard; a strange hissing had escaped him, and at once the tap glowed with a brilliant white light and began to spin. Next second, the sink began to move; the sink, in fact, sank, right out of sight, leaving a large pipe exposed, a pipe wide enough for a man to slide into.

Harry heard Ron gasp and looked up again. He had made up his mind what he was going to do.

“I'm going down there,” he said.

He couldn't not go, not now they had found the entrance to the Chamber, not if there was even the faintest, slimmest, wildest chance that Ginny might be alive.

“Me too,” said Ron.

There was a pause.

“Well, you hardly seem to need me,” said Lockhart, with a shadow of his old smile. “I'll just――”

He put his hand on the door knob, but Ron and Harry both pointed their wands at him.

“You can go first,” Ron snarled.

White-faced and wandless, Lockhart approached the opening.

“Boys,” he said, his voice feeble. “Boys, what good will it do?”

Harry jabbed him in the back with his wand. Lockhart slid his legs into the pipe.

ンドスンと軽くぶつかる音をたてるのが聞こえた。

底に着陸したらどうなるのだろうと、ハリーが不安に思いはじめたそのとき、パイプが平らになり、出口から放り出され、ドスッと湿った音をたてて、暗い石のトンネルのじめじめした床に落ちた。

トンネルは立ち上がるに十分な高さだった。ロックハートが少し離れたところで、全身ベトベトで、ゴーストのように白い顔をして立ち上がるところだった。

ロンもヒューッと降りてきたので、ハリーはパイプの出口の脇によけた。

「学校の何キロもずーっと下の方に違いない」ハリーの声がトンネルの闇に反響した。

「湖の下だよ。たぶん」暗いぬるぬるした壁を目を細めて見回しながら、ロンが言った。二人とも、目の前に続く闇をじっと見つめた。

「ルーモス！<光よ>」ハリーが杖に向かって呟くと、杖に灯りが点った。

「行こう」ハリーがあとの二人に声をかけ、三人は歩き出した。

足音が、湿った床にピシャツピシャツと大きく響いた。

トンネルは真っ暗で、目と鼻の先しか見えない。

杖灯りで湿っぽい壁に映る三人の影が、おどろおどろしかった。

「みんな、いいかい」そろそろと前進しながら、ハリーが低い声で言った。

「何かが動く気配を感じたら、すぐ目をつぶるんだ……」

しかし、トンネルは墓場のように静まり返っていた。

最初に耳慣れない音を聞いたのは、ロンが何かを踏んづけたバリンという大きな音で、それはネズミの頭蓋骨だった。

ハリーが杖を床に近づけてよく見ると、小さ

“I really don’t think —” he started to say, but Ron gave him a push, and he slid out of sight. Harry followed quickly. He lowered himself slowly into the pipe, then let go.

It was like rushing down an endless, slimy, dark slide. He could see more pipes branching off in all directions, but none as large as theirs, which twisted and turned, sloping steeply downward, and he knew that he was falling deeper below the school than even the dungeons. Behind him he could hear Ron, thudding slightly at the curves.

And then, just as he had begun to worry about what would happen when he hit the ground, the pipe leveled out, and he shot out of the end with a wet thud, landing on the damp floor of a dark stone tunnel large enough to stand in. Lockhart was getting to his feet a little ways away, covered in slime and white as a ghost. Harry stood aside as Ron came whizzing out of the pipe, too.

“We must be miles under the school,” said Harry, his voice echoing in the black tunnel.

“Under the lake, probably,” said Ron, squinting around at the dark, slimy walls.

All three of them turned to stare into the darkness ahead.

“*Lumos!*” Harry muttered to his wand and it lit again. “C’mon,” he said to Ron and Lockhart, and off they went, their footsteps slapping loudly on the wet floor.

The tunnel was so dark that they could only see a little distance ahead. Their shadows on the wet walls looked monstrous in the

な動物の骨がそこら中に散らばっていた。ジニーが見つかったとき、どんな姿になっているだろう……そんな思いを必死で振り切りながら、ハリーは暗いトンネルのカーブを、先頭に立って曲がった。

「ハリー、あそこに何かある……」

ロンの声がかすれ、ハリーの肩をギュッとつかんだ。

三人は凍りついたように立ち止まって、行く手を見つめた。

トンネルをふさぐように、何か大きくて曲線を描いたものがあった。

輪郭だけがかろうじて見える。そのものはじっと動かない。

「眠っているのかもしれない」

ハリーは息をひそめ、後ろの二人をテラリと振り返った。

ロックハートは両手でしっかりと目を押さえていた。

ハリーはまた前方を見た。心臓の動博が痛いほど速くなった。

ゆっくりと、ぎりぎり物が見える程度に、できるかぎり目を細くして、その物体にじりじりと近寄った。

ハリーは杖を高く掲げ杖灯りが照らし出したのは、巨大な蛇の抜け殻だった。

毒々しい鮮やかな緑色の皮が、トンネルの床にとぐろを巻いて横たわっている。

脱皮した蛇はゆうに六メートルはあるに違いない

「なんてこった」ロンが力なく言った。

後ろの方で急に何かが動いた。

ギルデロイ・ロックハートが腰を抜かしていた。

「立て」ロンが、ロックハートに杖を向け、きつい口調で言った。

ロックハートは立ち上がりーロンに跳びかかって床に殴り倒した。

wandlight.

“Remember,” Harry said quietly as they walked cautiously forward, “any sign of movement, close your eyes right away. ...”

But the tunnel was quiet as the grave, and the first unexpected sound they heard was a loud *crunch* as Ron stepped on what turned out to be a rat’s skull. Harry lowered his wand to look at the floor and saw that it was littered with small animal bones. Trying very hard not to imagine what Ginny might look like if they found her, Harry led the way forward, around a dark bend in the tunnel.

“Harry — there’s something up there —” said Ron hoarsely, grabbing Harry’s shoulder.

They froze, watching. Harry could just see the outline of something huge and curved, lying right across the tunnel. It wasn’t moving.

“Maybe it’s asleep,” he breathed, glancing back at the other two. Lockhart’s hands were pressed over his eyes. Harry turned back to look at the thing, his heart beating so fast it hurt.

Very slowly, his eyes as narrow as he could make them and still see, Harry edged forward, his wand held high.

The light slid over a gigantic snake skin, of a vivid, poisonous green, lying curled and empty across the tunnel floor. The creature that had shed it must have been twenty feet long at least.

“Blimey,” said Ron weakly.

There was a sudden movement behind them.

ハリーが前に飛び出したが、間に合わなかった。

ロックハートは肩で息をしながら立ち上がった。

ロンの杖を握り、輝くようなスマイルが戻っている。

「坊やたち、お遊びはこれでおしまいだ！ 私はこの皮を少し学校に持って帰り、女の子を救うには遅過ぎたとみんなに言おう。君たち二人はズタズタになった無残な死骸を見て、哀れにも気が狂ったと言おう。さあ、記憶に別れを告げるがいい！」

ロックハートはスペロテープで張りつけたロンの杖を頭上にかざし、一声叫んだ。

「オフリビエイト！ <忘れよ>」

杖は小型爆弾なみに爆発した。

ハリーは蛇のとぐろを巻いた抜け殻に躓き、滑りながら、両手でさっと頭を覆って逃げた。

トンネルの天井から、大きな塊が、雷のような轟音を上げてバラバラと崩れ落ちてきたのだ。

次の瞬間、岩の塊が固い壁のようにたちふさがっているのをジッと見ながら、ハリーはたった一人でそこに立っていた。

「ローン！」ハリーが叫んだ。「大丈夫か！ ロン！」

「ここだよ！」ロンの声は崩れ落ちた岩石の影からぼんやりと聞こえた。

「僕は大丈夫だ。でもこっちのバカはダメだ一杖で吹っ飛ばされた」

ドンと鈍い音に続いて「アイタッ！」と言う大きな声が聞こえた。

ロンがロックハートのむこう脛を蹴飛ばしたような音だった。

「さあ、どうする！」ロンの声は必死だった。

「こっちからは行けないよ。何年もかかってしまう……」

Gilderoy Lockhart's knees had given way.

“Get up,” said Ron sharply, pointing his wand at Lockhart.

Lockhart got to his feet — then he dived at Ron, knocking him to the ground.

Harry jumped forward, but too late — Lockhart was straightening up, panting, Ron's wand in his hand and a gleaming smile back on his face.

“The adventure ends here, boys!” he said. “I shall take a bit of this skin back up to the school, tell them I was too late to save the girl, and that you two *tragically* lost your minds at the sight of her mangled body — say good-bye to your memories!”

He raised Ron's Spellotaped wand high over his head and yelled, “*Obliviate!*”

The wand exploded with the force of a small bomb. Harry flung his arms over his head and ran, slipping over the coils of snake skin, out of the way of great chunks of tunnel ceiling that were thundering to the floor. Next moment, he was standing alone, gazing at a solid wall of broken rock.

“Ron!” he shouted. “Are you okay? Ron!”

“I'm here!” came Ron's muffled voice from behind the rock-fall. “I'm okay — this git's not, though — he got blasted by the wand —”

There was a dull thud and a loud “ow!” It sounded as though Ron had just kicked Lockhart in the shins.

“What now?” Ron's voice said, sounding desperate. “We can't get through — it'll take

ハリーはトンネルの天井を見上げた。

巨大な割れ目ができている。ハリーはこれまで、こんな岩石の山のような大きなものを、魔法で砕いてみたことがなかった。初めてそれに挑戦するには、タイミングがよいとは言えない——トンネル全体が潰れたらどうする？

岩のむこうから、また「ドン」が聞こえ、「アイタッ！」が聞こえた。時間がむだに過ぎて行く。

ジニーが『秘密の部屋』に連れ去られてから何時間もたっている——ハリーには道は一つしかないことがわかっていた。

「そこで待ってて」ハリーはロンに呼びかけた。

「ロックハートと一緒に待っていて。僕が先に進む。一時間たって戻らなかったら……」

ものの言いたげな沈黙があった。

「僕は少しでもここの岩石を取り崩してみるよ」ロンは、懸命に落ち着いた声を出そうとしているようだった。

「そうすれば君が——帰りにここを通れる。だからハリー——」

「それじゃ、またあとでね」ハリーは震える声に、なんとか自信を叩きこむように言った。

そして、ハリーはたった一人、巨大な蛇の皮を越えて先に進んだ。

ロンが力を振りしぼって、岩石を動かそうとしている音もやがて遠くなり、聞こえなくなった。

トンネルはくねくねと何度も曲がった。体中の神経がきりきりと不快に痛んだ。

ハリーはトンネルの終わりが来ればよい思いながらも、そのときに何が見つかるかを思うと、恐ろしくもあった。

またもう一つの曲り角をそっと曲がった途端、遂に前方に固い壁が見えた。

二匹のヘビが絡み合った彫刻が施してあり、ヘビの目には輝く大粒のエメラルドが嵌め込

められている。

Harry looked up at the tunnel ceiling. Huge cracks had appeared in it. He had never tried to break apart anything as large as these rocks by magic, and now didn't seem a good moment to try — what if the whole tunnel caved in?

There was another thud and another “ow!” from behind the rocks. They were wasting time. Ginny had already been in the Chamber of Secrets for hours. ... Harry knew there was only one thing to do.

“Wait there,” he called to Ron. “Wait with Lockhart. I’ll go on. ... If I’m not back in an hour ...”

There was a very pregnant pause.

“I’ll try and shift some of this rock,” said Ron, who seemed to be trying to keep his voice steady. “So you can — can get back through. And, Harry —”

“See you in a bit,” said Harry, trying to inject some confidence into his shaking voice.

And he set off alone past the giant snake skin.

Soon the distant noise of Ron straining to shift the rocks was gone. The tunnel turned and turned again. Every nerve in Harry’s body was tingling unpleasantly. He wanted the tunnel to end, yet dreaded what he’d find when it did. And then, at last, as he crept around yet another bend, he saw a solid wall ahead on which two entwined serpents were carved, their eyes set with great, glinting emeralds.

Harry approached, his throat very dry.

<p>んであった。</p> <p>ハリーは近づいて行った。喉がカラカラだ。今度は石のヘビを本物だと思い込む必要はなかった。</p> <p>ヘビの目が妙に生き生きしている。何をすべきか、ハリーには想僕がついた。咳払いをした。</p> <p>するとエメラルドの目がチラチラと輝いたようだった。</p> <p>『聞け』低く幽かなシューシューという音だった。</p> <p>壁が二つに裂け、絡み合っていたヘビが分かれ、両側の壁が、スルスルと滑るように見えなくなった。</p> <p>ハリーは頭のとっぺんから足のつま先まで震えながらその中に入って行った。</p>	<p>There was no need to pretend these stone snakes were real; their eyes looked strangely alive.</p> <p>He could guess what he had to do. He cleared his throat, and the emerald eyes seemed to flicker.</p> <p>“<i>Open,</i>” said Harry, in a low, faint hiss.</p> <p>The serpents parted as the wall cracked open, the halves slid smoothly out of sight, and Harry, shaking from head to foot, walked inside.</p>
--	---